窓際の平穏

人物

佐藤拓真 (8) (10) 小学生

(14) 中学生

(16) (17) (18) 高校生

ハチ (1) (3) (7) (9) (11) (13) (16) 拓真の飼い猫

佐藤和弘 (38) (47) (49) 拓真の父

佐藤真奈美 (38) (47) (49) 拓真の母

○豊崎・住宅街
背の低いアパートと一軒家が並ぶ。
○佐藤家・外観
「佐藤」と表札の付いた玄関扉の横に、シャッター付きのガレージがある。その前に黒いワゴン車が停まる。
○佐藤家・拓真の部屋
佐藤拓真(8)、扉を開けて部屋に入り、そのまま入口で扉をおさえる。佐藤和弘(38)が両手にペット用のゲージを抱えて部屋に入ってくる。続いてきた佐藤真奈美(38)が胸元にハチ(1)を抱えている。
拓真「おかあさん！」
真奈美「はいはい」
真奈美、拓真にハチを抱き渡す。
和弘「で、何でハチにするの？」
拓真「なんでって？　んー、なんでだろ」
真奈美「（笑って）なんでだろってあんた」

和弘「猫にハチ、かぁ……んー、なんでかな、
でも俺も気に入ってきたな」
真奈美「拓真はあんたに似てるよね、やっぱ
り（和弘を見る）」
拓真「（肩眉を上げて真奈美を見て）え、そ
うなのー？」
和弘「おいおい、喜べとまで言わないけどち
ょっとは表情にでもなんか出せよ」
三人、笑っている。ハチ、首を回して
部屋中を見渡す。
ハチの声「どうやら今日からの生活は、猫同
士で狭いところに集まって食べて寝て、を
繰り返していた昨日までとは違うようだ」
真奈美「（ハチの顔を覗き込んで）里親を募
集されてた子だから人間慣れしてるのは分
かるけど、まだ1歳なのに大人しいわね」
和弘「犬とか猫は人間よりも実年齢が高いっ
ていうしな。まぁ、こいつも他の同年代の
子と比べたらませてるけど」
和弘、拓真の頭に手を乗せる。少しだ

け首を上げ頭上を見る拓真。

ハチの声「今、俺を抱えているのはタクマといったかな」

拓真「よろしくな、ハチ〜」

拓真、ハチの両脇を抱えて頭上へとかかげる。ハチの鳴き声と拓真の笑い声を背中越しに聞きながらゲージを組み立てる和弘と真奈美。顔を見合わせる。眉を下げて少しうつむく真奈美の肩を微笑しながら叩く和弘。

○豊崎・住宅街

殆ど高さが一様な一軒家が並ぶ。その側にクレーン車が数台停まっている。

○佐藤家・拓真の部屋

佐藤拓真(10)、勉強机の椅子に座って出窓の天板に頬杖を突き、窓の外を眺めている。入り組んだ住宅の屋根やアパートの上階部分が外に広がっている。

ハチ(3)、天板に座り拓真の隣で一緒に窓の外を眺めている。
佐藤家の前の道を、子供数人が何かを叫びながら走って通り過ぎる。
拓真「（子供を目で追って）おー」
身体を少し前傾させる拓真を見るハチ。
ハチの声「俺がこの家の飼い猫となって2年ほど経ったが、こいつはこうして、俺とともに窓の外を眺めていることが多い」
首を前へ向け直して、遠くの方へと駆け続ける子供たちを見るハチ。
ハチの声「今は隣で一緒に外を見ているこいつが、ああやって他人と馴れ合うところを見たことはある。でも、多くはない。この家の外で俺以外の誰某と仲良くしている様子を見るのは、ごく稀である」
ハチ、拓真の方を見て鳴く。
ハチの声「お前はもっと、あいつらのようにここから出て遊ばないのか？　」
拓真、ハチに気付き小さく笑う。ハチ

の喉元を指でくすぐる。
拓真「お前は遊びに行かないのか？　とか思ってんだろ？　ハチさんよぉ～」
ハチの声「言葉は交わせないはずなのに。こいつは何かと勘がいいやつだ」
拓真、頬杖を突き直し、視線を再び出窓の外へ戻す。
拓真「さっきの、学校の同級生でさ。俺も遊ぶときは遊んでるよ、あいつらと。でも、眺めるのも遊びなんだよ、俺にとっては」
ハチの声「眺めるのも遊び？　」
拓真、再び出窓の方向に向き直る。重機の稼働音が鈍く響いてくる。
拓真「最近多いなぁ。近くに行ったらもっとうるさいんだろうな。ガガガガガって」
少し目線を上げて遠くを見る拓真。
ハチの声「今、こいつが真似た擬音は、人間が操縦する大きな機械の音だ。猫が扱うには物理的に無理なものらしい。まぁ、俺は見たことすらないものだが……」

○豊崎・住宅街・工事現場
クレーン車が建築物を壊している。

○佐藤家・拓真の部屋
ハチの声「猫の俺達にはできないが人間にはできることがある。もちろん、人間にはできないが猫にはできることもあるが」
ハチ、丸くなって右後脚の股関節辺りを舌で何度か舐める。
拓真「（ハチを見て）おお、股関節柔らけぇなぁ～。そんなところまで届かねぇわ」

○豊崎・住宅街（夕方）
殆ど高さが一様な一軒家の並び。その中にある、物件が取り壊されてできた数か所の空き地に、夕日に照らされた住宅の影が映っている。

○佐藤家・拓真の部屋（夕方）
ハチ、出窓の天板で丸まって寝ている。

半開きになった窓から弱い風が吹いてきて、ハチの髭が揺れる。

男の子の声「じゃあな〜！」

ハチ、目を開けて首を伸ばして外を見下ろすと、拓真が家の前で手を振りながら玄関扉を開けている姿が見える。

数人の男の子が歩きながら振り向く体制で拓真に手を振っている。

×　×　×

拓真が部屋に入ってくる。天板に座ったまま拓真の方へ首を向けるハチ。それに気づいて天板へと近づき、ハチの首元を指先で撫でる拓真。

拓真「ただいまハチ。あ〜、疲れたぁ」

鳴き声を上げるハチ。

拓真「猫って人間よりも歳を取るのが早いんだってね。ハチは今3歳で俺は10歳だけど、人間の年で言うとハチはもう俺の3倍の歳らしいよ。そういやお父さんもそんなこと言ってたっけ」

拓真、ハチの両脇をもって抱える。
拓真「人間と猫が一緒に暮らしてたら、猫の方が先に死んじゃう。今日みたいに友達ともできるだけ遊びたいけど、ハチが先にいなくなるのは寂しいなぁ」
拓真、ハチの頬を指先でくすぐる。
ハチの声「俺たちが人間よりも成長が早く寿命が短いことは、以前暮らしていた場所で人間が話していたな、そういえば」
女の子の声「うえ～ん！　」
拓真とハチ、出窓から外を見下ろすと、幼女が母親に手を引かれ、泣きながら佐藤家の前を歩いている。
ハチの声「寂しい、か。涙を流すとか、人間は猫よりも感情表現が豊かだ。それが特に羨ましいというわけではないが、興味深いとは常々思う」
真奈美の声「拓真ー！　ご飯よー！　」
拓真、部屋の扉の方に顔を向ける。
拓真「（声を張って）ほいほーい！　んじゃ、

また後でハチのご飯も持ってくるから」
拓真、部屋を出ていく。
ハチの声「……あいつ、今日は寝転がらなかったな」
ハチ、天板から降りて絨毯を爪で掻く。
ハチの声「他の子供と別れて帰ってきた後は俺たちのように地べたへ横になるのを良く見るものだが」

○豊崎・豊崎商店街入口（夕方）
「豊崎商店街」と書かれたアーチ看板の下を、買い物袋をぶら下げた人々が通り抜けていく。その向かいには「青果業務スーパー」と書かれた看板のあるスーパーが建っており、多くの人々が出入りしている。

○佐藤家・拓真の部屋（夕方）
佐藤拓真(14)、勉強机の椅子に座って出窓の天板に頬杖を突き、窓の外を眺め

ている。佐藤家の前の道を、「業務スーパー」と書かれた買い物袋を持った人が通り過ぎる。ハチ(7)、天板に座りそれを眺めている。

拓真「最近商店街の近くにデカい業務スーパーができたんだよ。昔はよく八百屋のおっちゃんのところに母さんと行ってたけど、うちの家もすっかり業務スーパーばっかりだわ」

「業務スーパー」と書かれた買い物袋を自転車の前カゴに乗せた男性が、ゆっくり佐藤家の前を通り過ぎる。

ハチの声「こいつの言うことを全て理解しているわけではないが、その業務スーパーとやらは人間にとって好都合らしい。衣食住に関わるモノを安価で買い揃えられる場所だそうだ」

拓真「普通の商店街じゃこんなことないんだろうけど、この地域みたいな小さな商店街だから、たった一店の便利なスーパーから

モロに影響受けちゃったんだろうね」
ハチの声「もっとも、そうやって様々なものをひとまとめにできるのであれば、八百屋というもののように、何も別々に商売する必要があるのだろうか……と思ってしまうのは野暮なのだろうな、きっと」
拓真「（眉毛を上げて）お？」
佐藤家の前の通りを、眼鏡をかけた制服の男子が通り過ぎる。肩から大きなショルダーバッグを背負っている。
拓真「眼鏡かけてるから一瞬誰だかわかんなかったよ。あいつ、小学校が一緒でさ。中学受験したんだよなぁ」
拓真、歩いていく男子の背中を目線で追い続ける。
拓真「小学校の時に一緒に遊んだことあったなぁ、そういや」
ハチ、拓真の顔を見る。少し下がり眉毛になっている拓真。
ハチの声「俺たち猫には特にないが、受験と

いうもののように、人間の中には何らかの義務を課せられる者もいるようだ」

拓真、伸びをしながら欠伸をする。

拓真「受験かぁ〜……」

拓真、椅子に座ったまま勉強机へ移動し、机上に突っ伏す。それを見るハチ。

ハチの声「程度は違えどこいつも受験とやらを経験する時期が来るようだ。まぁ、そのために手を動かすことよりも、ああやって伏せている姿を見ることの方が多いが」

ハチ、出窓越しに家の前の通路を見る。

○（回想）佐藤家・外観

男の子数人に手を振る佐藤拓真(10)。

（回想終わり）

○（元の）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

突っ伏したままの拓真(14)を見るハチ(7)。

ハチの声「……『遊ぶ』こいつを見なくなるにつれ、ああやって伏せている姿を見るこ

とが多くなったような気がする」
ハチ、天板から降りる。
ハチの声「感情の落ち着きは相変わらずだが、猫の俺と馴れ合うのが至高だなんてことは当然ないだろう」
拓真、ゆっくりと身体を起こす。
ハチの声「となれば、余計なことには首を突っ込まないのが、人間も猫も共通だろう」
ハチ、丸くなって目を閉じる。

○（回想）豊崎・豊崎商店街（夕方）
通り道を行き来する人々と、店先に立つ店主たちのやり取りで賑わっている。
（回想終わり）

○（元の）豊崎・住宅街（夕方）
人通りの少ない通り道の両側に、シャッターの下りた店が点在している。

○佐藤家・拓真の部屋（夕方）

佐藤拓真(16)、勉強机の椅子に座って出窓の天板に頬杖を突き、外を眺めている。背の高い建物が逆光で黒く映る。拓真の後ろ姿を部屋の隅に座りながら眺めているハチ(9)。

ハチの声「この家に来て随分と経つが、こいつは相変わらず窓の外を眺めてばかりいる」

拓真のため息が顔面前に白く浮かぶ。

ハチの声「ばかりいる、というより……」

息が消えると、拓真のやややつれた頬が露になる。

拓真「業務スーパーができてから、商店街の店もどんどん閉まってっちゃったんだよなぁ……あ、噂をすればだ」

幼い子供を後部座席に乗せた自転車が、佐藤家の前の道を通り過ぎる。前かごには「業務スーパー」と書かれた買い物袋が入っている。

ハチの声「こんな冬でも窓を開けて、ぶつくさ小言を垂らしながら、ほぼ毎日のように

外を眺めている。本当に変わったやつだ、こいつは。本当に……ああ、寒いな……」

拓真「八百屋のおっちゃん、元気かなぁ……」

眼鏡をかけた制服の男子が、ショルダーバックを肩から掛けて単語カードを見ながら、佐藤家の前を通り過ぎる。向かい側から運動部仕様のジャージを着た自転車を二人乗りしている男子が近づいてくる。二組がすれ違う瞬間に、眼鏡をかけた男子が若干下を向く。

拓真「あいつ、高校生になってもいっつもあんな感じだな。重たそうに鞄引きずって。参考書どんだけ入ってんだろ……いわゆるエリートとかいうのになんのかな」

眼鏡をかけた男子が少し足早になる。

ハチの声「こいつとあの眼鏡の人間が一目瞭然なように、人間は成長するにつれてそれぞれ変わった個性を持つようだ。容姿だけなのか、感情もなのかは分からないが……」

拓真「嫌じゃないのかなー。いつも遠目でし

か見えてないけど、あいつの表情見てると楽しそうには見えないんだよなー」

頬杖をつき、下がり眉毛で眼鏡をかけた男子を見続ける拓真。

ハチの声「こいつの言うように、俺もあの眼鏡の人間が楽しそうに見えたことがない。どこか、自身の気持ちを抑制して生きているように見えなくもない」

拓真、両手を頭の後ろに回し、椅子に勢いよくもたれかかる。

拓真「（上を向き）あー。俺もまた受験かー」

拓真を見るハチ。

ハチの声「同じ受験という物事を前にしても、こいつのようにいつみても気楽そうな人間もいる。全く不思議な生き物だ、人間は」

ハチ、身体を丸くして小さく身震いする。

ハチの声「変わったやつ……不思議……こんな季節に外の空気に触れる場所へ自分から行く俺が言えたことではないか……」

拓真が持たれた反動で天板へと身を傾けたタイミングで、二人乗り運転の自転車が佐藤家の前へと到達する。後部側の男子がふと首を上げ、よぉ、と声を上げながら拓真に手を振る。運転している男子も続いて斜め上に首を上げて合図する。拓真、手を振り返す。

拓真「俺、あの二人と小中一緒なんだよね。高校もあいつらは一緒だって言ってたわ。サッカー部だったかな？」

自転車を追う拓真の瞼が微妙に下がる。

拓真「部活か……ちょっとやってみたかったかもな。受験も……できんのかな、また」

ハチ、拓真をじっと見続ける。それに気付いた拓真が眉毛を上げてハチを見る。拓真、ハチを撫でる。

拓真「（小さく笑って）ごめんごめん、まぁ、見なかったことでお願いしますわ」

拓真、椅子に座ったまま机に移動し、灯りをつけて机上にあるノートを開く。

ハチの声「受験……勉強……」
拓真、ペンを持って動かそうとした手をすぐに止める。ペンを握る仕草を数回繰り返す手が、かすかに震えている。
拓真「（小声で）……駄目かもなぁ」
拓真、ペンを机に置いて灯りを消し、部屋を出ていく。それを天板から見続けるハチ。
ハチの声「……窓の外を見ていた時、あいつは、俺の反応から何を考えたのだろう？」
ハチ、天板から降りて勉強机上に椅子をつたって飛び乗る。
ハチの声「人間に通じる言語を俺は話せない。昔あいつが俺に話してきた架空の世界における超能力なども、もちろん持っていない」
勉強机の棚に、参考書類が並ぶ。棚の右端の方に、『英雄伝説～』と書かれた書物が数冊ある。
ハチの声「眼鏡の人間にとっての受験とはおそらく色々と意味が違うが、向き合う必要

のあることが、俺にも……」
ハチ、そのまま机上で丸くなり顔をお腹にうずめる。

○豊崎・豊崎公園
ブランコ・砂場・鉄棒がある小さな公園の周りに桜並木がある。その上から、不文律に並んだ一軒家と防音シートで覆われた高い建造物が覗いている。

○佐藤家・拓真の部屋
佐藤拓真(17)、机で勉強をしている。窓の天板で丸くなっているハチ(10)。
拓真「（伸びをしながら）んー！　腹減ったな。もう1時前か。降りるか」
拓真、席を立って歩き出す。扉を開けて部屋を出ようとした時、ドアノブを握ったまま床に崩れ落ちる。ハチ、天板から飛び降り拓真に近づき鳴き声を上げる。階段を駆け上がる音がする。

真奈美の声「拓真!?」

佐藤真奈美(47)と佐藤和弘(47)、倒れている拓真に駆け寄ってきて側で屈む。

真奈美「またなの!?　学校でもこうして……」

和弘「とにかく病院に。拓真、起きれるか？」

拓真「（弱弱しく頷き）んん……」

和弘と真奈美に肩を担がれて階段を下りていく拓真。ハチ、階段の上からその様子をじっと見ている。

○豊崎・街並み

防音シートで覆われた高い建造物が疎らにある。所々に立っている木々に止まっているセミの鳴き声が、工事の作業音で殆ど聞こえなくなっている。

○佐藤家・拓真の部屋

出窓の天板に寝そべるハチ、階段を上る音にぴくりと反応する。正気の薄い顔つきでゆっくりと扉を開ける拓真に

駆け寄るハチ。
拓真「ごめんごめん、しばらく会えなくてさみしかったろ〜？」
拓真、ハチを顔の正面へ抱える。拓真の両腕が微かに震えている。
ハチの声「ああ、寂しかった、かな」
ハチ、欠伸をするように口を開いて鳴き声を上げる。
拓真「お？　もしかして今、日本語通じたとか？　お前すげぇな！　（笑顔になる）」
ハチの声「わかるとも。お前が俺に対して、気丈にふるまおうとしていることくらい」
拓真、膝を曲げそっとハチを床へと下ろす。拓真、腰を上げようとして少しぐらつき、床に手をつく。手で床を押して勢いづけて再度腰を上げて衣装ケースへと向かう拓真を見つめるハチ。
ハチの声「手も顔も随分とこけたもんだな…足取りもおぼつかない」
和弘の声「拓真、入るぞ」

拓真「（入口の方へ振り返り）はーい」
和弘、部屋に入ってくる。片手に大きい黒色のキャリーケースを持っている。
和弘「おい、準備する時は俺か母さんを呼べって言ったろうに」
拓真「いいじゃん、着る服くらい選ばせてよ。俺は母さんに似てファッションにはうるさいんだよ？　本当は」
和弘「（微笑みながら）入院したら服に気なんて配らないだろ。めんどくさくなって検査着みたいなやつをずっと着るようになると思うよ、俺は。あの患者がよく着てる」
拓真「そうなったら父さん譲りだな、無頓着？っていうのかな」
笑い合う2人。ハチ、出窓の天板へ上り身体を丸め、お腹に顔をうずめる。

○豊崎・街並み（夕方）
防音シートが被せられた建造物が疎らな中に、1，2棟程度の高層マンショ

ンや背の高いビルが建っている。

○佐藤家・拓真の部屋（夕方）

佐藤拓真(18)、天板に両手を突き、外を眺めている。側には松葉杖が置かれている。その隣に座っているハチ(11)。

拓真「減ってきたな、工事のうるさい音」

ハチ、真後ろに首を回す。視線の先には部屋のど真ん中に置かれた黒色のキャリーケース。

ハチの声「どうやら、こいつとの別れはもう間近らしい」

拓真の声「ハチ」

ハチが振り向くと、拓真が笑っている。

拓真「俺ってさ、趣味とか無いじゃん。んで考え事とかもあんましないから、窓からぼーっと外眺めてんのが好きだったんだわ」

ハチ、目を瞑り右前脚を舌で舐める。

ハチの声「嘘をつけ。趣味がないんじゃなくて、やりたくても出来なかったんだろう。

考え事をしないんじゃなくて、しても仕方ないと、早々から悟っていたんだろう」

○（回想）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

自転車を二人乗りしているジャージを着た男子を、天板に頬杖をつきながら半目で眺める佐藤拓真(16)。

（回想終わり）

○（元の）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

ゆっくり目を開けるハチ(11)。

ハチの声「お前が眼鏡の人間を心配していたり、部活とやらに興味を持っていたり……お前は感情が豊かな人間だよ、本当は」

ハチが首を上げると、微笑む佐藤拓真(18)が依然としてハチを見ている。

ハチの声「俺は忘れていないぞ。年相応でない落ち着きを持ったお前が、感情の変化を見せた瞬間一つ一つを」

拓真、ハチの頭にそっと手を置き、窓

の外に顔を向け直し、側にある松葉杖に手を置き直す。

○（回想）佐藤家・拓真の部屋

天板に頬杖をついて、ハチ(3)の喉元を指でくすぐる佐藤拓真(10)。

拓真「お前は遊びに行かないのか？　とか思ってんだろ？　ハチさんよぉ～」

（回想終わり）

○（元の）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

ハチ(11)、部屋の隅にあるゲージを見る。

ハチの声「寝るときでさえも、この天板の上だったことの方が多かったな」

ハチ、窓の外へ首を向け直す。

ハチの声「俺とここから外を眺めることが元から好きだった、ということは本当なのかもな。いや……本当であってほしいな」

佐藤拓真(18)、ハチの頭を撫でる。

拓真「普通なら……いや、普通って何なのか

さえもよくわかってないけどさ。本当ならもっと周りの奴らと同じようなことをしたいって、色々わがまま言っても怒られなかったと思うんだ」

拓真、俯いてハチの頭から手を離す。

拓真「けど、そんなこと言っても無駄とかじゃなくて、別に言いたいと思わなかったんだ。それって多分、段々色々なことができなくなっていく自分に、失望したくなかったからなんだって、さ」

拓真、顔をハチに笑いかける。

ハチの声「この家に来てから、俺もこいつと一緒に外を眺めてばかりいた」

拓真、身体を振りながら窓を限界まで開ける。弱い風が部屋へと吹いてくる。

拓真「俺が窓開けたら、ハチはここに来て一緒に外を眺めてたよな（天板を軽く叩く）」

ハチ、拓真の叩いた場所を一瞥する。

ハチの声「こいつは自分のことで滅多に考え事をしない。だが、こいつが何時に、どの

ような感情を抱くのかということは、一番理解しているつもりだ。この窓際でのこいつを、俺は長らく見てきたのだから……」

拓真とハチがほぼ同時に向き合う。

拓真「あのさ……」

拓真、微笑んでハチを抱き上げる。

拓真「豊崎なんて、元々景色映えするような街じゃないし、ハチを飼い始めた時にはもう、デカいマンション建てるためにそこら中で工事が始まっててさ。都市開発でうるさい地域に連れてきちゃってごめんな」

○（回想）豊崎・住宅街・工事現場

クレーン車が骨組みだけになった木造の建築物を壊している。

（回想終わり）

○（元の）豊崎・住宅街（夕方）

綺麗な高層マンションに、「業務スーパー」と書かれた買い物袋を持った親

子が入っていく。

○佐藤家・拓真の部屋（夕方）

佐藤拓真(18)、部屋を見渡す。

拓真「でも、ここからは工事の音しか聞こえないから、でかい建物がポツポツ増えてい
ってるなってたまーに思うくらいで」

拓真、窓の外を見る。逆光で黒く染まった背の高い建物が疎らに見えている。

拓真「知らないうちに、地元とかいって愛着持てるような地域じゃなくなっていってたみたい」

拓真、ハチ(11)の後ろ脚が天板につく形で出窓の方向へ身体を向ける。

拓真「けど……俺はお前とこうやって、特別景色映えもしない窓の外を眺めてる時間がいつも楽しかったんだ」

拓真とハチの視界の先に、夕焼けに染まった豊崎の街並みが広がっている。

ハチの声「とりわけ趣深いわけでもない外の

移ろいを眺めながら、独り言のように猫に話しかけるのが楽しかったのか。本当に変わったやつだ」

ハチ、小さく鳴く。

ハチの声「けど、俺もお前と一緒に、ここから外を眺める穏やかな時間が楽しかったさ」

拓真「だから寂しいよ、出ていくのは。連れて行きたいくらいだ、本当に」

ハチの声「出ていく、連れて行きたい、か…」

ハチ、身体を拓真の方へ捻る。

ハチの声「こいつのように毎日一緒にいてもよくわからない……いや、わかってはいるけど受け入れようと俺がしていないだけか」

ハチの顔が自分の首元に来るように抱きかかえ直す拓真、少しよろめく。

ハチの声「俺のような頑固で自身を分かろうとしない奴も人間にはいるだろうが、眼鏡をかけたあいつのように、離れた場所から外見を見るだけで大体の境遇がわかる奴もいる。この違いが、猫の俺に『人間は面白

い』と思わせてくれいている」
ハチ、拓真の顔に突っ込むように首を左右に小さく振り、鳴き声を上げる。
ハチの声「そして、今まさに芽生えている『寂しい』などという、人間と猫が同様に持つ感情もある」
拓真の鼻をすする音に反応し、少し耳を動かすハチ。
ハチの声「猫と人間で感情の表し方は違う。けれども、互いに気持ちを共有しあえるのはこんなにも嬉しいことなんだな」
拓真の胸元に顔をうずめるハチ。
ハチの声「悲しいという相反する感情を抱くはずなのにな、俺たちの今後を考えると」
拓真「また会おうな。ここで……」
拓真の目尻から出た涙が頬を伝う。涙の跡が夕日に当たり、拓真のやつれた笑顔を照らす。
ハチの声「……ああ、会おうな」
拓真、ハチを頭上に持ち上げる。

拓真「さぁ、メシだメシ〜！」
ハチ、窓の方向へと首を捻る。
ハチの声「そういった様々なことを教えてくれたのは、この場所と、この主に他ならない」
窓へと差してくる夕日が、拓真とハチを照らし続けている。

○豊崎・街並み（夕方）
あちこちに高層建築物が点在している。

○佐藤家・拓真の部屋（夕方）
勉強机と椅子以外に家具の無い部屋の、埃を被った窓の天板の右側に、ハチ(16)が座っている。眩しそうに眼を細め、半開きになった窓から外を眺めている。
ハチの声「あいつが声で真似ていた鈍い機械音は最近になって聞こえなくなっていった。この街は、俺が来た時よりも随分と変わっていったらしい」

ハチの視線の先に、逆光で黒く映る高い建造物が数棟見えている。

○（回想）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

ハチ(11)を抱きかかえる佐藤拓真(18)。

拓真「また会おうな。ここで……」

（回想終わり）

○（元の）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

ハチ(16)、天板を前足で軽く引っ掻く。

○（回想）佐藤家・拓真の部屋

佐藤和弘(49)と佐藤真奈美(49)が、家具の整理をしている。側をうろつくハチ(13)を、和弘が抱きかかえる。

和弘「拓真が『今までありがとう』って。本当に、ありがとうな」

（回想終わり）

○（元の）佐藤家・拓真の部屋（夕方）

ハチ(16)、顔を上げて左側に首を向ける。
ハチの声「結局、会えなかったな」
ハチ、佐藤家の前の道を見る。
ハチの声「あの眼鏡をかけたやつを見かけることも、自転車で通り過ぎていった二人組に声をかけられることも、もう無いのかもな。眼鏡の方は、何かと気にかけられていたな、そういえば」
ハチ、勉強机の方を見る。
ハチの声「あいつがいなくなっても、俺は相変わらずここから外を眺めては、視線の先の物事について緩く考えを巡らせている」
ハチ、窓の方へ再度向き直る。佐藤家の前の道を、幼い子供数人が叫びながら走り去っていく。

○（回想）佐藤家・拓真の部屋（夕方）
天板上のハチ(3)の首元を撫でる拓真(10)。
拓真「猫って人間よりも歳を取るのが早いんだってね」

拓真、ハチの両脇をもって抱える。
拓真「ハチが先にいなくなるのは寂しいなぁ」
（回想終わり）

○（元の）佐藤家・拓真の部屋（夕方）
ハチの声「ああ、さみしいな、拓真」
ハチ(16)、天板に寝そべり、左側を見る。
出窓の外を眺めている佐藤拓真(10)の横顔が浮かび、ゆっくり消えていく。
ハチの声「そろそろ俺も寿命が近づいているようだ。だが、窓の外を眺めてばかりの生涯だったことに悔いはないし、これで終わるのも悪くない」
ハチ、窓の外を見る。視線の先には、夕日に染まった豊崎の街並みが広がっている。弱い風が吹いてきて、ハチの髭を揺らす。ハチ、ゆっくり丸くなる。
ハチの声「今もなお続くこの平穏な時間を、案外俺は気に入っている」
ハチ、ゆっくり目を閉じる。